

- 八七年十月五日付)。
同上、三七二ページ。
- 43 ジャム・ギョーム「インターナショナルの想い出」(一九〇七年、第二卷)一九二ページ。(本書は一九七〇年二巻で復刻された「訳者」)
- 44 アルトゥール・レーニン「ロシア革命におけるマルクス主義とアナキズム」『ディ・インターナツィオナーレ』誌(ベルリン、一九二九年)
- 45 カール・マルクス「社会主義倫理選集」マクシミリアン・ルベル編集、一九四八年、序文、注4参照。
- 46 「パリ・コミューンと国家の観念」より抜萃。(訳文は江口幹訳による)

- 47 「フランスの内乱」(La Guerre civile en France, 1871)より抜萃。
これについては後出の、コミューンの代議制度に関するクロボトキンの批判を見よ(二八九―二九〇ページ)。
- 48 これについては後出の、中世の自由都市(コミューン)に関するクロボトキンの文書を見よ(二七八―二八六ページ)。
- 50 教会区評議会(英国国教会で一般事務をつかさどる)。「協同組合について」『エガリテ』誌(ジュネーヴ、一八八九年九月二十一日)より抜萃。
- 51 一八七二年一月三日付、ロドヴィ・コナブルッツィへの手紙より抜萃。表題は編者による。

直接行動と絶対自由主義的建設への予想について

バクーニンの弟子および後継者たち、すなわちジャム・ギョーム、セザル・ド・パーブ、ジュラ連合の人々、ピョートル・クロボトキンとともに、われわれは、無政府主義社会の建設計画を体系的に述べる段階へ入ることになる。

これら先駆者たちの著作の上澄みをとリ、また引き延ばすことにより、いまやアナキズムは、いわば第二期の息を吹くこととなり、プロレタリア革命勝利の翌日の、将来社会組織の骨組を細部にわたり、かつ可能なかぎり正確に作成しようとする。こうした予想をえがくことを、マルクスと彼のいわゆる「科学的社会主義」派は、「ユートピア的」とよぶ社会主義から自らを隔てようとする考慮にとりつかれて、たいていは拒んでいる。

読者がここに見出すものは、文学的生気や天分では確かに前に見たものに劣るであろう。だが、二十世紀後半の今、社会主義建設のつびきならぬはめに直面していることを知るわれわれとしては、これから読もうとする諸社会計画の中から、もはや先駆者の構想におけるように、噴き出る衝動的な観念ではなく、たぶんそれほど熱情的でないが、確固たる具体的材料を汲

みとることができる。それら材料は、二十世紀のフランスおよびスペインのアナルコ・サンジカリストたちによって大いに有効に用いられたあとをうけて、今世紀後半におけるわれわれの世界再建の助けとなることが可能なのである。

冒頭に、以下のものの序言として、第一インターナツィオナル・バーゼル大会において、パリ建築労働組合同盟代表、指物師ジャン・ルイ・バンディが、一八六九年十一月に提出した報告の抜萃を挙げることにする。バンディは、本章の初めに登場する社会的予想論者たちの先駆けである。彼は、実際に二重の連合体、政府の廃絶と賃金制度の廃止とを必然的帰結とする、コミューンの連合体と労働組合の連合体との展望を描いている。

……われわれは労働者の間に二つの方式の集団を考ええている。まず、同じ場所に住む労働者に日常の諸関係を保持することを可能にする地域的集団と、次には異なる地域、流域、地方等々の間の集団である。

第一の方式。この方式の集団は、現在社会の政治的関係に対応し、これに有効にとつてかわるものである。それは、現在まで国際労働者協会が採用してきた方式であった。二方式による事態は、抵抗の諸団体にとっては、金銭をたがい貸与して助け合い、社会的問題を討議するための集会を組織し、共同の利害に関する方策をとるに講ずる地域的諸団体の連合を意味する。

しかし産業の規模が拡大するにつれ、第一のものとともに、第二の方式の集団が必要になる。すべての国々の労働者が、彼らの利益が連帯的であり、しかもそれがたがい傷つけあっているのを感じている。将来は、一方では、都市の困いから抜け出て、もはや国境を認めずに世界の端から端までの労働の広大な分割を確立する組織を要求している。この二重の見地から、抵抗の諸団体は国際的に組織されなければならない。各職業団体が、一国の中で、また他の国民との間で、通信および情報の交換を維持することが必要である。……このような集団方式は権力分散化の動因となる。なぜなら、問題は、もはや各国に全産業に共通の中心を設けることでなく、各産業がその最も発達した土地を中心とするからである。例えばフランスでは、炭坑夫はサン・テイエヌヌを中心に連合を結成するのに対し、絹織物労働者はリヨンを中心に、贅沢品産業はパリで連合を結成するわけである。これら二種の集団がひとたび活動するならば、労働は、賃金制度を廃止して現在および将来のために組織さ

れることになる。……

都市および地方ごとに形成される種々の同業組合の団結が……将来のコミュニケーションを形成し、同様に他の方式の団結が、将来の労働者代表を形成する。政府は、団結した職業団体の評議会と、各職業団体の代表からなり、政治にとってかわるべき労働関係を規制する、委員会ととりかえられることになる。

……われわれは次の決議を提案する。
「大会は、すべての労働者が種々の職業団体において抵抗の基金を創設することに積極的に努力しなければならぬとの意見である。

これら結社が形成されるにつれて、大会は、各支部、連合体および中央評議会に対し、同業組合の結社に留意し、かくて職業団体の全国的連合体の結成を刺激することを促すものとする。

これら連合体は、各産業に関するすべての情報を集め、共同で採用すべき方策を指導し、ストライキを調整し、その成功に敏活に努力し、賃金制度を自由な労働者の連合制に代えるよう期することをもち、その任務とするであらう」

セザル・ド・パーブと アデマル・シュヴィッツゲールとの論争

ミクロス・モルナルによるセザル・ド・パーブ

第一インターナショナルのベルギー代表の中で最もきわだった人物は、おそらくセザル・ド・パーブであった。一八四二年に生まれて一八九〇年に死んだド・パーブは、ベルギー労働運動の隆盛と凋落、ついで新たな躍進を体験した。ベルギー国家の官吏の息子であったド・パーブは、弁護士としての職につくための準備をしたが、父の突然の死でその学業を放棄することをよぎなくされた。彼は、やがて自由思想家の運動における彼の同志となったデジレ・プリスマのもとで印刷業者となった。彼は「連帯者の結社」に加入し、ついで一八六一年、新しい友人フオグレヤステーンズといっしょに、戦闘的民主主義の団体「民衆」社を建設したが、これから四年後に国際労働者協会ベルギー支部が成立した。この間学業を再びつづけて医師となったド・パーブは、それ以来生涯の終わりまで、ベルギー労働運動の第一線に身をおい

た。われわれは波瀾の多い彼の生涯のすべての歩みを述べることはできない。ただ彼はほとんど毎回インターナショナル大会代表に選ばれ、そこでの彼の演説と彼の取り成し役とが最も注目すべきものに属していたことを指摘しておこう。

彼のイデオロギーと政治的立場とを規定することは、彼の生涯を叙述することよりもいっそう困難であろう。自由思想家か、連合主義者か、ブルードン主義者か、集産主義者か、共産主義者か、無政府主義者か、社会民主主義者か？ 彼は実際には何であったのか？ だが当時のベルギー労働運動がどうであったかという点、エリ・アレヴィの巧みな、しかしなんとしても不十分な定式によれば、「相互主義的かつマルクス主義的な、集産主義ともよばれる混合社会主義」であった。

われわれには、二つの問題は一つでしかなく、これにはただ「マルクス主義」と、ブルードンの相互主義またはバクレーンの意味の無政府主義の各カテゴリーから出発することによってのみ、答えうるように思われる。なぜなら、ド・パーブと彼の同志たちの思想は、ドイツおよびフランスに起こった大きな思潮の影響を受けると同時に、ポツテヤコランのごときベルギーの思想家の理論、および職人組合の時代にまでさかのぼる労働者の伝統の跡をも残しているからである。たしかにド・パーブには、多少ブルードン主義のおよび無政府主義的な時期があったし、また同様にマルクスの思想の影響をも受け

ている。しかし彼の著作や演説集を読むと、ド・パーブはインターナショナルの運動において、あるいは一方の傾向に従いあるいは他の傾向をとりながら、集団的所有の理念と個人の自由とを和解させようとするベルギー集産主義からいつも多くはかけ離れていない。社会正義と政治的自由にもとづく体系の探究において、ド・パーブは——われわれは少なくともそう信ずるが——この目標を達する適切な手段に関しては、かつて決定的な選択を行なわなかった。集中化を支持する人々はしばしば彼の連合主義を批判し、他方アナキストたちは彼の体系における「国家主義的な」特徴を非難した。

これと同様に、棄権か政治活動かの選択に関するド・パーブの態度も、決して確定的ではなかった。彼は、ロンドン大会（一八七一年九月）では未決定であり、その後数年間「棄権論者」となったが、ついにはベルギー社会主義「青年」の運動に加わり、これから結局一八八五年にベルギー労働党の創立をみるにいたったのである。

なおわれわれは、ド・パーブはそのきわめて妥協的な性格からして、態度決定のさいに多くの柔軟性をもちえたことを指摘しておく。自由で寛容な精神の持ち主である彼は、論議を深め、論争のレベルでは不可能である理解を可能ならしめる哲学的レベルに達しようとするためである。

将来社会における公益事業の組織について⁵⁾

(セザル・ド・パーブによる)

われわれは、現実の事態、現に存在する公益事業を出発点とし、ついでこれら公益事業のうち、新しい社会組織が不用にすにちがいないと思われるものを除外し、新たな必要に応じて要求される公益事業、現在すでに明らかに必要と感じられている公益事業が何であるかを探究するだろう。そうしたあとで、これらさまざまな公益事業の実施が、誰によって自然的、合理的に行なわれるかを問うのである。このあとでわれわれは、経済発展全体を一瞥し、この発展がいくつかの産業にもたらし、あるいはもたらすであろう深刻な変化が、これら産業を真実の公益事業となし、もしくははならずであろうかいなかを考え、最後に、公益事業は将来どのように遂行されるべきかを問題とするであろう。

労働者生産組合による管理か？

種々の公益事業は何人によって組織され、遂行されるべきであろうか？

これについてわれわれは、二つの大きな思潮、相対立する二つの真の流派に出会うことになる。その一つは、一般的にいえば、公益事業を個人または自発的に形成される生産組合の私的発意に任せ、かくしてそれらから、いわば公益事業の性格を除去し私的な事業たらしめようとする傾向のものであり、自由放任派である。他は、概して公益事業を国家、地方(県、郡)、ないしは市町村の手に委ねる傾向のものであり、干渉主義派である。

たしかに、鉄道、鉱山その他を労働者生産組合に移譲することは、少なくともその当初には、現在大規模な公益事業について特権を取得している資本家の会社が取得したのと同じ性格の気ままな経営とはならないであろう。しかし現代の資本家的貴族階級もまた、第三身分の出身であること、また財界の大立者、もしくは彼ら自身ではないにせよ、彼らの父あるいは祖父としても、現在のようになる前には、労働者、だが特権的地位の労働者であったことを忘れてはなるまい。莫大な完成材料を所有し、社会が引き渡した自然的または人為的独占を用意したこれら労働者生産組合は、機械力の不断の改良、科学的発見の産業への新しい応用、この機械使用の発達とあらゆる種類の科学的発明の応用とから生ずる、経営費の減少および資本蓄積のおかげで、その先輩たる資本家の会社のように、遠からずして経済状況全体を支配するようになるであろう。

おそらく人々はわれわれに、そうした移譲はいくつか

の条件によってのみ行なわれ、労働者生産組合は、移譲を受けるに当たってある契約に縛られる、というであろう。しかし、国家が石炭、鉄道線路等々を移譲した資本家会社もまた、契約に縛られたのである。このことは、彼らの会社がその社員に莫大な配当金を分配し、公共の富をまぎれもなく明白にかき集めるのを妨げたであろうか？ 諸君が何かの独占を譲渡する会社がその経営資材の所有者となったから、この資材を改良し、経費を節約し、死亡のために職員が減る場合のほかは職員の更新もせず、結局資本を蓄積し、要するに新たな特権階級となるのを防ぐ契約とは、どのようなものであるのか？ かくしてわれわれはただ、われわれの父たちが古い貴族制にブルジョア貴族制をとりかえたように、ブルジョア貴族制に労働者貴族制をとりかえるという有害な楽しみを感じるだけであろう。

人はわれわれにこういふかもしれない。この資材を会社のものにすることは必要でなく、それは、大きな社会的集合体が会社に提供し、その不可譲の所有物としてとどめておくことができ、したがって文明の進歩から生ずる改良改善は、社会全体のために行なわれるのである。われわれもこのことを認めよう。だがそのとき、会社はもはや確かに特権的な会社ではなくなり、たんに、市町村、州、郡または国家等の代表する社会のために一定の公益事業を担当する協同企業体となるであろう。

国家による管理か？

他方、いっさいの公益事業ないしはその最も重要なものを、官公庁、とくに国家の手に引き渡す考えに傾いている人々のうち、かなり多数の者は、その国家が、直接立法あるいは少なくとも普通選挙にもとづく共和制であり、民主的に構成され、すべての政治的自由を尊重するという条件でのみ、この方式を支持し、専制もしくはたんに君主制のもとでさえ、これを欲しはしない。彼らが、純粹に政治的な動機から、専制権力の強化を怖れるのは当然であり、したがって、経済的見地からは国家の手中に返すことが望ましい多くの公益事業、すなわち教育、保険、鉄道等々をも、さしあたりはまったく私的事業に任せようとしている。

……あらゆる国々の歴史をとおしてわれわれに伝えられている国家の観念、専制国家、すなわち、これまでいたるところで、法のおよび経済的奴隷状態におとし入れられた多数の人々に対する一つの家族、広いカースト、または階級の支配の組織にはかならなかつた国家の観念から出発して、多数の社会主義者は「国家への戦い」を叫んできた。彼らは、どのような形態、どのような意味のものであるかと、国家について語られることを聞こうとはしない。彼らはきわめて率直に国家、あらゆる国家の絶対的破壊を宣言している。彼らの中で最も論理的な

人々は、コミュニケーションとても結局は小国家、ふつうの国家より領土が狭く、より小さな規模においてその機能を果たしている国家にすぎないと見て、もはやコミュニケーション国家をも本来の国家にもまして欲しはしないことを言明している。彼らはその旗に「無支配」という言葉を書きこんだ。これは無秩序という意味の「アナラル」ではない。なぜなら、それは反対に、経済諸力の自発的組織化によつて真の秩序に達しようとする信じるからである。彼らのアン・アルシーは、ブルードンが理解する意味のもの、すなわち権力の非存在、權威の非存在であり、そして彼らの考えでは、国家の廃止という意味では、權威および権力という言葉は、彼らの眼には国家とまったく同意語である。

しかし、これら社会主義者たちは、実際にこれまで權威、権力、よくいっても専制（しかもつねに無為な少数者よつて労働者大衆に加えられたがゆえに、専制中の最悪なもの）でしかなくなつた国家とならんで、一つの真の事実、ますます真実となるであろう、現代のより大きな経済現象に関する事実をも考慮した。すなわち彼らは、現代の主要生産部門において大産業が小産業にますますとつてかわり、資本の集中、集合力(業協)と分業とのいよいよ広範囲な適用実施、蒸気によつて働き、多くの道具や機械、かつてははなればなれであつた道具をいっせいに働かせ、したがって大工場への多数労働者の集合を強いる強大な機械力の不断の導入を眼にし、そしてこれら

はすべて、日に日に大産業の領域を拡大するものでしかないことを知つた。彼らは、この現代の大生産においては、孤立した労働者や職人は集団の労働者に、労働者集団に席を譲つたこと、これら労働者集団は、利害が彼らと真正面から明白に対立する団結した資本家を前にして、必然的に抵抗の集団、職上の結合におのれを結集し、この運動の中に小産業の労働者をも引きいれ、かくして職業組合による集団形成が一般化されねばならぬことを知つた。そして彼らは、労働者階級のこの自発的な組織が、中世のブルジョア階級のコミュニケーションの自発的な集団と類似してはいなくは新しい社会集団の基礎となるべきものと結論した。利害の共同は、職業組合をして不可避的に、協議してたがい支持し合うようにさせるため、その結果として最初は地域的な、ついで地方的、國際的な連合の全体が生ずることになる。さらに彼らは、こうした理論的觀察に満足せず、その事業に手をつけた。彼らは、イギリスの労働者のように、労働組合を建設し、それらの連合体を結成し、この連合主義的かつ経済的基礎の上に國際的「協会」を構成しようとした。そのさい、彼らは、現代経済生活の奥底に根ざす労働者団体というこの集団を、純粹に政治的な自治体および国家という、多少人為の時代おくれな集団に対立させ、後者の将来における失格を宣言した。

いままでのところ、これ以上のことは何もなされてない。だがわれわれは、労働者団体、同じ地域で集結し

た職業組合、要するにプロレタリアのコミュニケーションは、今日の公的自治体やブルジョア・コミュニケーションにとつてかわつたとき、社会生活にとつて継続することが不可欠なくつかの公益事業に対して、それらとまったく同じ立場にならないか、どうかを考えている。新しいコミュニケーションにおいても、安全、戸籍、街路、公共広場、街燈、家庭飲料水等の保持、下水掃除および最初にあげた公益事業のすべてが必要でなくなるのかどうかを考えている。労働者の集団、コミュニケーションの職業組合は、これら種々の公益事業の管理を分担する代表を一括して指名するのを選ばないかぎり、その内部から各公益事業を担当する代表を選任することが必要にならないであろうか？ いずれの場合にも、われわれはこのようにして公益事業の地方的処理、コミュニケーションによる処理を行なうことにならないであろうか？

しかしいっさいの公益事業をたんに局地的に処理することはできない。なぜなら、そのうちの多くのもの、まさに最も重要なものは、その性質自体からして一コミュニケーションをこえた広い地域にわたつて処理するように定められているからである。鉄道を管理し、主要道路を維持し、河川の堤防を築き、川を運河にし、他の地域への手紙や電報の送達に当たる等のことをするのは、コミュニケーションであろうか？ 明らかにそうではない。したがって、各コミュニケーションは合意してコミュニケーション連合を結成し、公益事業に従事する代表を選任しなければならぬ。この代

表が地方のすべての主要公益事業の管理に当たるように一括して任命されるか、それとも特定の事業に対して専門別に任命されるか、それは重要なことではない。これら代表は、すべての場合彼らの間に直接かつ持続的な関係をもちつはらずであり、つねに地方的または全国的な公的管を構成する。名称は事柄に関係がない。当初、ここで地方または全国というのは、伝統と言語以外の基礎を欠くため、一般に現在の民族もしくはその主要区分、たとえば大ブリテンについてはイングランド、スコットランド、ウェールズおよびアイルランド、スイスについてはドイツ語系スイスとロマン語系スイス、ベルギーについてはワルロン語地方とフラマン語地方（後者は種々特殊の類縁から、たとえば言語の問題がオランダといっしょにならないとして）に一致する以上でありそうなどとはない。

そしてこの地方的もしくは全国的なコミュニケーション連合は、国家でないとしたら、実際には何であろうか？ しかり、それは国家である。その名でよばなくてはならないものだからである。ただそれは、連合制国家、下から上へと形成された国家であるだろう。初めには経済的集団、コミュニケーションを形成する職業組合の集団を基盤とし、さらに、連合したコミュニケーションの直接の表われである大公益事業に関する官公庁とならんで、おそらく同一職業の地域組合の地方的連合からなる一般的結合（イギリス人のいう合同組合）の直接の表われである労働会議所

を備えた国家であるだろう。

「アン・アルシー国家」

国家は一つの機械である。それは大公益事業の道具である。他のあらゆる機械と同じく、国家という機械もまた、現代の大規模生産とそれから生ずる生産物の大規模な流通とに不可欠である。それはまた、他のすべての機械と同じく、労働者にとっては殺害者であって、これまでつねに特権階級の排他的利益のために働いてきた。これを終わらせるためには、労働者たちがこの機械を手に入れることが必要である。しかし、われわれの手にいれた上で、その国家という機械が何びとをも害しないためには、重大な変改を必要としないかどうか、ブルジョア階級の搾取がそれにつけ加えたいくつかの歯車を廃棄し、またブルジョア階級の怠慢がなおざりにした他の歯車をつけ加える必要がないかどうか、それをすっかり新しい土台の上に据える必要がないかどうかを、よく見るとしよう。こうした留保をした上で、われわれはこういふことができる。労働者諸君よ、機械をわれわれのものにしよう、国家をわれわれのものにしよう、と。

これは、アン・アルシーという言葉がわれわれを恐れさせるというのではない。反対に、アン・アルシーがブルジョア階級に抱かせる恐怖（これは、労働者の場合よりはるかにひろがっているようである）は、われわれを

微笑ませ、この言葉を捨てての残念に思わせるのみである。それゆえ、この言葉はわれわれにとっておそらくより無条件的には彼らとは同じ意味ではないにしても、われわれは必ずしもそれを棄て去るものでないことを、わが友人のアナキストたちも認めてもらいたい。結局、われわれが考え諸君が欲するような国家は、正確には強権、統治体制、力もしくは策略をもって民衆に強制される何ものか、ギリシャ語でいえば、つまりは支配ではないのである。国営郵便事業、国営鉄道、国家の関与による荒地の開墾等々の方式にも、まさに強権的な観念が存するであろうか？ われわれは、非強権的な国家ともよく考えることができる（われわれは非支配的国家ともいおうとしたが、しかしこれは止めにした。なぜなら、読者の多くは国家と強権的というこの二つの言葉はからみ合ったものでしかないという二つの言葉はからみ合っただけで、決議を履行し、議決された法律を施行し、その法律に従って公益事業を管理する活動のうちに存するのではなく、まさに法律を制定し強制する活動のうちになり、国家の属性のうちに再びはいりこむこともできなくなる。法律は、あるいはコミュニケーションまたは何かの集団において直接議決され、あるいはすべての人々に授けられる総合教育やその結果として生まれる精神統一によって、社会の法則が、人々の心にすっかり明白になり、天文学、物理学ないし化学の法則のように、議決する必

要がなくなるからである。

このようにして、たんに地域やコミュニケーションの、その地域の職業組合によって任命され、住民全体の監視のもとに行われる地域的管理の指導下におかれる公益事業は、コミュニケーションに所属することになる。国家には、コミュニケーション連合によって任命され、地方労働会議所の監視のもとに行われる地方的管理の指導下におかれる、より広範囲な地方的または全国的な公益事業が属することになる。これですべてであろうか？ いな、さらに、その性質上国際的もしくは幾地方かにわたる（その名称はさして重要でない）公益事業が存在し、将来ますますふえるであろう。これら公益事業のためには、国際的連合が必要であり、さらにわれわれは普遍的、人類的または惑星的な連合とまでいいたいであろうが、いくつかの民族のきわめて後れた状態から見ると、こうした形容語が現実の事態に照応するまでには多くの時を要するであろう。われわれは、この人類最高の構成体が、いかにして同様に普遍的な公益事業についての単数または複数の管理を必要とするのであるかを示す必要はない。それはおそらく、われわれが国家構成体について指摘したのと同じ基礎を有するであろうし、またおそらく労働の国際的連合の代理人たちによって形成される、職業の国際会議所を設けるであろう。労働の国際的連合のいくつかは、いまやすでにイギリス労働組合の発意によって形成されはじめて

共産主義と「アナキー」

だが、おそらく人はわれわれにこういふであらう……すべての生産部門を、公益事業を構成するはずのもののみならず必要があるのではないかと。これでは、恐るべき共産主義におちいることになる、と諸君は考えないだろうか！

あるいくつかの言葉が対応する観念が、別の名称に変えさえすれば、世界に広く行なわれ、非常によく認められるのに、それらの言葉が人々をおびえさせる力をもつのは、驚くべきことである。アンリアルシーという言葉もその一つであり、これは、政府機能の限らない縮減、究極的には政府の廃止自体という考えが、これら勇敢なブルジョアたちが擁護した自由放任主義経済学者たちの最後の言葉であるのに、わがブルジョアたちの頭をぞつとさせるのだ！ 公認の経済学者と同時に反国家的社会主義者を含む他の範疇の人々にとっては、国家と産業問題への国家の干渉という考えも、そうしたものである。

中央管理、要するに国家は、現代の大規模生産の少し前にはそれなしにやってくることができたのに、大規模な生産と流通を前にして、経済集中化の正常な機関、生産に原料を供給する大産業と商品と消費者に運ぶ大輸送手段との正常な管理として、ますます社会的に必要なものとなっている。このことはかくも必要であるため、こう

である。

ブルジョア国家と労働者国家

……われわれは、国家が、われわれを統殺し、刑に処し、投獄し、そしてまたわれわれを統殺するのを見た。われわれは国家から裁判官、獄吏、統殺者を剝奪しようと思う。われわれは自分の眼で、現在の国家、ブルジョア国家でも、己れの富むことのみを欲する資本主義的会社に生産を任せるかわりに、自ら生産しようとするときには、これら会社以上によく、またより安く生産することを見てきた。われわれはこの証左をベルギー国営鉄道、郵便業務、港湾の建設に見るのである。しかし、われわれがまだ見えていないものは、そしてわれわれもしくはわれわれの子孫が見るはずのものは、労働者国家、自由な労働者コミュニティの団結にもとづき、いっさいの主要な社会的事業の運営管理を決定的に担当する国家である……

しかし、正統派経済学の官許公認の高所からわれわれに投げつけられる呪詛非難など、われわれにはどうでもよい。……もつとはるかに身近に関係することは、国家に委託されるすべての機能、国家のあらゆる干渉に対して、ほかの点ではわれわれとあい並んで行動する社会主義者たちが感じている本能的反撥である。こうした人々とわれわれとの間にはただ大きな誤解があると思う。

した国家の手中への経済的集中化を欠く場合には、どうしても有力な会社の手を経済諸力が集中し、それら会社は真実の寡頭制国家にも等しくなるのである。共産主義という言葉もまた特殊な扱いを受け、社会主義者たちからは中傷として斥けられ、経済学者たちからはユートピアの最たるものとみなされ、最後にブルジョア階級には盗奪と乱婚制を聖化する理論、結局はもつとも忌むしいものと見られてきた。

他の人々の眼にはかくも恐怖の的である「アンリアルシー」に対すると同様に、ある人々の眼にはかくも恐ろしい「国家」という言葉にもおびえないわれわれとしては、どうして「共産主義」という言葉におびえるのであろうか？ この言葉は、明確に規定された意味をもたず、まったく合理的な観念を表わしもしないことからすると、ほかのどれよりもわれわれをおびえさせないはずである。なぜなら、過去に考えられた共産主義は、つねに感情的または神秘的な、われわれが大いに望むことだが、精力的かつ急進的な形態のものであって、それを、相続権を奪われている階級と、スバルタクスからバプーフにいたるその煽動者たちとは、彼らの恒久的な所有権回復の要求を表明し、また貧困と社会的不正に対する彼らの不断の抗議を聴きいれさせるために、利用している。だが、共産主義という言葉は、またより正確な意味をも有し、真に科学的な観念をも表わしている。共産主義は共同所有、公的所有、社会の所有を語ろうとするの

おそらく国家という言葉がわれわれを彼らから引き離す唯一の点であらう。そうだとしたら、われわれは進んでその言葉を放っておき、何か別の名称の、より意にかなった遠まわりの表現のもとに事柄を保持し、理解することを明言しよう。すなわち公的管理、コミュニティ連合代表等々という表現である。

だが、われわれが国家に帰属する役割についてわれわれを非難する人々のかたわらには、われわれがコミュニティに帰属する役割を斥ける人々もいる。あらゆるニュアンスのジャコバン主義者にとって、国家は、大いなる全体、万物がそこで生き活動する牧神である。彼らにとって国家は、むろんきわめて重要で高級な天職を有する特殊の機関であるのみでなく、さらに社会のすべてである。彼らはまた、人々が国家への入場券なしに生まれる、国家の門を通らずにこの世界から去ってゆくことを理解しない。彼らは、われわれが国家からそのあらゆる光輝、そのあらゆる光彩、そのきらめく甲冑、赤黒の美麗な式服を奪い取って、坑夫の仕事着や機関手の服を着せ、共和国の将軍、共和国の検事はたくさんだ！ というのをもはや容赦しないであらう。しかしもう一度いうと、これもまた荒唐への憎悪であるのか？ コミュニオンを社会組織の軸とする、だが諸君はこれを滑稽なこととは見ないのか？ コミュニオンは県のたんなる細分であり、県が国のたんなる細分であるのと同様である。知事と町村長、総督と市長の任命は国家に属する。唯一不可

分の共和国はこのことを欲するのだ！

諸君の自主的コミュニケーションについてはどうかというのと、これは、国家から生命を受けることで満足するのではなく、反対に国家こそは自主的コミュニケーションに由来することを主張する！ 国家をもつて社会主義の一歯車たらしめようとする諸君の社会的コミュニケーションについていえば、これは、旧来の石油放火者でしかなく、その手柄はわれわれの知るところであって、共和制万歳の叫びに対してすでに三度、一七九三年にはギロチンにより、一八四八年六月には小銃射撃により、一八七一年五月には霰弾射撃によってわれわれを殺戮したのである！ 山岳党の市民諸君よ、あっぱれだ！ 諸君の威力は、当時の諸君の同盟者、諸君の手柄を科学的に是認することに満足した正統経済学派の大神祭たちの威力よりも、いささかより恐ろしいものであることは認めよう。労働の自由の名においてシャスボー銃を細工させ、機関銃を作らせて、プロレタリアの脇腹に弾を貫通させる……だが、諸君、われわれがもはや諸君の裁判官、警察官、死刑執行官を欲しないのは、まさにわれわれが刑に処せられ、投獄され、銃殺され、あるいはギロチンにかけられるのを欲しないからなのだ。

万能国家および従属的コミュニケーションというジャコバンの見解に対し、われわれは、すべての管理者を例外なく自ら任命し、立法、司法、警察を自らとり行なう解放されたコミュニケーションという見解を対抗させる。憲兵国家という

自由主義の見解に対し、われわれは非武装の、だが青少年の教育と主要な全般的事業の集中化に当たる国家の見解を対抗させる。コミュニケーションは本質的に政治的機能の機関もしくは人々がそのように呼んできたもの、すなわち法律、司法、安全、契約の保証、無能力者の保護、市民生活となる。しかしそれは同時にいっさいの地域的公益事業の機関でもある。国家は本質的に科学的統一と社会に必要な全般的な主要事業の機関となる。

インターナショナルの前での公益事業の問題

アデマル・シュヴィッツゲール
セザル・ド・パーブへの回答

彫版師・細工師アデマル・シュヴィッツゲール（一八四四—一八九五年）は、スイス・ジュラの人で、ジャム・ギヨームの友人であり、インターナショナル・ジュラ連合の最も活動的な闘士の一人であった。ジャム・ギヨームは、一九〇八年パリで、彼の『著作集』を出版した。以下は、それからの抜萃であり、厳密にアナキスト的見地からセザル・ド・パーブの報告に答えたものである。

……公益事業の問題についてすでに語られたことからして、社会再組織に関し二つの大きな思想の流れ、一つは労働者国家を目ざし、他はコミュニケーション連合を目ざす流れが、社会主義世界を二分していることが明白である。ある人々は、この大論争の根本には同じ考えについて表現のちがいの問題が存在するにすぎないと考えている。しかし、公益事業の問題に関する論議は、もはやこ

の点に疑いを残すことはできない。二つの異なる事柄が問題なのである。これがまさにわれわれの論証しようとする点である。われわれは、公益事業の問題を労働者国家の見地とコミュニケーション連合の見地とから研究し、終わりこれを歴史と社会革命に照らして見ることにしよう。

「労働者国家」は現存国家に類似する

現代国家の根本的理念は何であり、国家の支持者たちはいかなる必要によってその存立を正当づけているのか？ 人々の間のあらゆる関係には、純粹に私的な関係もあるが、しかしすべての人々に関連する本質的なものが種々存在するというのである。このことから公的秩序の必要が生じ、それによって人々の間の公的、一般的関係の正規な働きが保証されるというのである。ブリュッセルの人（ド・パーブ）の覚書をよく考えてみるとよい。人は、それを支配している労働者国家の見解は、根本においては現存国家に対する見解にまったく似たものであることを見出すであろう。

その見方にはこうした異論が出される。すなわち、労働者階級によって組織され、指導され、管理される国家は、それが現在ブルジョア階級の手握らされている抑圧、搾取の性格を失い、現在のごとき、政治的・司法的・警察的・軍事的組織であるかわりに、経済的機関、社会的必要と科学の応用とに従って組織された公益事業

の調整者となるであろう、と。

だが、そのような国家の働きぶりがどんなものであるかを説明しよう。合法的政治行動ないし社会革命は、コミュニケーションおよび国家の指導を労働者階級の手に乗ねる。労働者階級の欲すること、あらゆる支配と資本のあらゆる搾取とからの労働の解放、これを彼らに実現することができる。労働用具は集団所有化され、生産は組織化され、交換が行なわれ、流通は交換に便宜を与え、知育と科学的、人間的教育とが現在の無知にとつてかわり、衛生条件は個人と社会の生存を保証し、公共の安全は現在の敵対と憎しみの情念や粗野な競争の犯罪的な働きにとつてかわるにちがいない。国家の独裁者となつたプロレタリアートは、集団所有を布告し、コミュニケーションなり国家なりのためにそれを組織する。プロレタリアートは、労働用具が生産と生産者集団の利益およびコミュニケーションなりに国家の利益を保証するために利用されるべき条件を確立する。ついで彼らは、生産物交換の働きを決定し、流通手段を組織し開発する。青少年の知育および教育課程を作成し、その実施をコミュニケーションなり国家なりに任せる。コミュニケーションまたは一般の保健衛生事業を確立する。コミュニケーションおよび国家の公共の安全を確保するために必要な手段を講ずる。

このようにして、社会組織に関するすべての事柄において、プロレタリア階級はまず、私的発意に由来するものと公的発意に属するもの、私的サーヴィスであるものとするその瞬間から、この法律に反感をいだくまたは多数者と少数者が存在することは不可避である。もしも国家が法律を施行する力を有しないならば、法律は遵守されなくなり、国家の行為は信用を失ひ、廃棄されるであろう。だから国家理性は、国家の憲法と法律に対する叛逆のあらゆる企てを抑圧しうる力の編制を必要とする。国家の基礎、秩序、法律に加えられる攻撃を罰するための全司法組織、法律の遵守を監視するための警察、反乱が起つたときそれを鎮圧し、外国の攻撃から国家を防御するための軍隊、これらは国家存立の基本的原理の必然の結果である。

今日まで人がそう呼んできたような公益事業が、すべての国家の実質的存立に必要なとしても、学校と公立教会はそれに劣らずその精神的存立に必要なである。知性は国家のこの絶対的支配を最も自然的な事柄として認めることが必要である。また学校と教会とによるいっさいの公教育は、国家に関係あるすべての物ごとに対する絶対的尊重にもとづいてい。そして、その本質的性格として経済的規制の機能が割り当てられる労働者国家においては、所有、生産、交換、流通のあらゆる組織が、物ごとを管理する多数者または少数者の手に握られて、現在権力の座にあるブルジョアの行使する政治的・司法的・警察的・軍事的機能とは別の強力な支配の手段となるであろう。国家の主人である労働者は、ブルジョアにもまして、彼らの国家に対する攻撃に情容赦なくふるま

と公的サーヴィスであるもの、コミュニケーションの領域に属するものと国家に属するものとを区別しなければならぬ。今日もまさにこのように行なわれている。

私的な物ごとを公的な物ごとから区別し、除外し、公的な、コミュニケーションおよび国家に属するいっさいの物ごとを組織するこの仕事を、プロレタリア階級は、一体として直接実行するわけではない。その意見、その一般的意志を分解し、分析することが必要であり、このためにはそれらを、委任者の意見を議会の演壇で擁護すべき代表者のうちに具現させなければならない。つねにこのようにして今日も行なわれているのである。

「労働者国家」は解決ではない

これら労働者議会はどのように構成されるのであろうか？ 悪名高い普通選挙以外の手段は存在しない。したがって、少数派に対して法律を制定する多数派がいぜん存在するのであろうし、あるいは逆の場合もあろう。なぜなら、国家は公共の利益を守るために必要なものと認められているかぎり、国家の法律はすべてに強制的であり、これを逃れようとする人々は犯罪者として扱われるだろうからである。社会の経済的利益を満たすために組織されるはずのこの労働者国家は、全速力で立法、司法、警察、軍隊、学校、公認教会に乗り出すことになる。一方に国法が、他方に充足すべき種々の利益が存在

うであろう。というのは、彼らは最も完璧な理想を実現したと信じているからである。

それゆえ労働者国家は、われわれには、社会再組織の問題に対して、人類の利益に合致する解決を提供しているとは思われない。人類は、労働用具、労働組織、いくつかの公益事業が国家またはコミュニケーションの領域に移されたからといって、解放されはしない。生産の果実の公正な分配、よりよい知育と教育の便益、社会生活の享受は、たしかに各人に、現存事態におけるよりもよく確保されるであろう。しかし個人および集団のまっとうな自主性はなら実現されないし、人間が解放されるためには、労働者としてまた個人として、そうならなくてはならないのである。

……ブリュッセル大会の議決に従う定式を用いて社会再組織の問題を提起するのは、不可避的に問題の真の用語について知性を迷わせ、あらかじめ労働者国家を結論することだったのである。

新しい二つの原理＝集産主義と連合主義

……巨大な歴史的帰結として、わが「協会」を動揺させた論争と闘争とから二つの原理が現れた。新社会組織の基礎的経済的基礎としての集団所有の原理と、個人々の集団ならびに人間の集合体の基礎としての自主および連合の原理とである。新しい社会組織がどのような

のであるかを探究するのに、なぜ、上述の二原理の必然の結果を考慮するかわりに、何が私的サーヴィスであり、何が公的サーヴィスであるか、公的サーヴィスは何びとにより、どのようにして果たされるかを問うのであろうか？ 合理的に推論して、人々はこういうべきであらう。個人所有を集団所有に転換する必要に直面している。この転換を行なう最も実際的な手段は何か？ それは、労働者がブルジョアのために用いてきた労働用具を直接掌握し、これからは彼ら自身のために用いなければならぬということだ。この革命的方策は、革命や労働者階級の全面的解放を指導する権利があると思いつている。そしてこの方策は一般民衆の自発的活動からのみ発することが可能であって、民衆の自発的活動こそは、革命の最初の活動以来、自主と連合の原理の実践的確認であり、この原理はあらゆる社会集団の基礎である。この革命の嵐の中で、ブルジョア階級の経済的特権とともに、彼らがその特権を維持する手段とした国家のあらゆる制度が崩壊する。

こんどは、社会再組織の見地から、このような革命の結果を研究するとしよう。どこかの地域で、種々の職業組合が事態の主人公である。ある産業では利用する機具類はごくわずかな価値しかない。他の産業ではそれがかなり高価であり、利用度もはるかに高い。もしこの産業に働く労働者の集団が、利用する機具類の所有者でな

ればならぬとすれば、この所有は労働者の一集団のために独占を創り出し、他の諸集団に損害を及ぼすことが可能である。革命のための種々の必要は労働者集団をして同一の行動をとらせるが、それはまたそれら集団に、連合の協約を結び、それによって革命の獲得物を互いに確保することを命ずる。これら連合協約は必然的にコミューンの、地方的、国際的であり、各集団が自分で革命の利益を己れのものとなしうるだけの保証をふくむであらう。かくして集団所有は、人間活動のこれこれの部門、これこれの自然の富、先立つ労働によって集積されたこれこれの労働用具の発達と多少一般的重要さにしたがって、まず最初はコミューンの所有であり、ついで地方の、また国際的でさえある所有であるべきものように思われる。

生産者集団の構成に関してはどうかというと、それらを生んだ革命的関心の自発性こそは、彼らの組織と、社会再組織の見地からするこの組織の発展との出発点である。革命行動のために自由に集団を結成した労働者たちは、生産、交換、流通、知育と教育、保健衛生、安全のためにもこの自由な集団結成をつづけるであらう。また革命闘争において、ある集団の中の一個人、あるコミューンの中での一集団、ある地方の中での一コミューン、国際関係の中での一地方の敵対的態度が、革命の勝利への前進を妨げなかったのと同じように、孤立は、革命の成果の発展が問題であるときには、自由に活動する

労働者大衆の進歩的前進を妨げることではできないであろう。

国家にとってかわるコミューン連合

人は労働者国家とコミューン連合との本質的な差異をよく注意するがよい。国家は、何が公的サーヴィスであるかを規定し、またこのサーヴィスの組織を確定する。そこに存するのは、規制された人間の活動である。コミューン連合においては、靴屋は今日自分の家の部屋で仕事をしている。明日は、何かの発明を応用して履物の生産が百倍になり、同時に簡単になるかもしれない。そのとき、靴屋たちは団結し、連合し、彼らの仕事場や製造所を建て、かくして全般的な活動にはいることになる。これは人間の活動のあらゆる部門についても同じである。限りある部門は限りある仕方、一般的な部門は一般的な仕方、組織される。集団の中、コミューンおよび地方の中と同様である。これが、人間の自由と活動とに役立てられる、日々を経験であり、発達である。

この組織においては、現存国家の公益事業、その立法、司法、警察、軍隊、学校、公立教会はどうなるのか？ 自由な契約が法律にとってかわった。紛争がある場合には、それが起こった集団の中の仲裁裁判所によって裁定される。抑圧の方法に関してはどうかというと、そうしたものは、自由な組織を基礎とする社会において

はもはや存在の理由をもたない。社会革命がブルジョア主義の実際的結果をすべて一掃したあとでは、私の属する集団の組織と活動が等しく尊重され、またこの組織と活動が解放された人類の利益から逸脱したい場合には、その集団の組織と活動は私を害することはありえないからである。安全という仕事は、おそらくなお暫くは有用であるが、しかし現存秩序におけるような、一般的で、不可欠的で、人を困らせ、抑圧する性格をもつ制度ではありえないであらう。

社会革命の大きな諸潮流

問題は、実践の見地からすると、各国の労働者大衆の社会主義的発達の度合いと、また社会革命の多少決定的な第一歩にしたがって、解決されるであらうことには異論の余地がない。今日、社会問題を革命によらずに解決しようとはえて確言するのは、無知な者か悪意の人々だけである。ドイツの兄弟たちが、彼らの現在の社会主義運動の合法的性格にもかかわらず、この点でわれわれと一致しているのは喜ばしいことである。だが、革命は二つの仕方で生起することが可能である。すなわち革命は、労働者階級による現存国家の政治権力の獲得とこのブルジョア国家の労働者国家への転換を直接に目標とし、同時に行動の基礎とすることができ。革命は他方、あらゆる国家の破壊とプロレタリアートのいっさい

の革命的諸力の自発的、連合的団結を直接の目標とし、また行動の基礎とすることができる。革命行動は、もし国によって異なることが可能であるならば、一国においてもコミューンによって異なることも同様に可能である。ここではコミューンは権威主義的、政府中心主義的な性格、ブルジョアの気質さえ保持するであろう。ほかではそうしたものはまったく掃き除かれるであろう。さまざまな文明諸国における民衆の現状とこうした事柄についていままも広く行なわれている種々の見解によく通じている者は、革命がきわめて多様な性格を現わすのは不可避的であることを理解するであろう。われわれはおそらくすべての社会主義理論、共産主義、集産主義、相互主義が、革命につづく大きな流れに依りて多少限定されもしくは一般的な適用を受けることを見るであろう。

今日、ドイツのような大国が労働者国家の観念に執着し、他のイタリヤやスペインのような国々がコミューン連合の観念に固執するのを見るとき、どうしてこれ以外であろうか？ こうした革命的傾向の多様性は、ブルジョア階級にとっては社会主義の無力を糾弾する一題目であった。だが、少しでも物ごとをはっきり見る者には、新しい社会組織についてかくもさまざまな見解が存在するにしても、労働者階級はブルジョア組織を倒壊せしめるためにはますます一致していることが容易に認められるのである。しかもこの見解の相違は、無力の原因ではなく、反対に、労働者の各集団は、その特定の見解を突

現し、他の集団の見解の実現を尊重することによって、すべてが革命の勝利により大きなかわりをもつという意味において、力を増す原因となりうるのである。どうしてこのことが、プロレタリア階級の革命的前進を、すなわちドイツの人々が労働者国家を実現し、他方イタリヤ、スペイン、フランスの人々がコミューン連合を実現するのを、またフランスでいくつかのコミューンは個人的所有を保持するのに、他のコミューンでは集団所有が勝利を収めるのを妨げるであろうか？

コミューン連合が勝利するだろう

こうした留保をしながらも、われわれは、人類の利益の増進に最も適した組織がこれにはいたるところで必要とされ、最初の革命的な表明が革命の諸段階の相つぐ発展に対して決定的となるであろうことを確信している。われわれは、この確信をさらに押し進め、コミューン連合こそは社会革命から最大の力をもって立ち現われるであろうことを確信するものである。

人々はこのコミューン連合を、労働者の全般的協定、万全な結合の実現を妨げるものであり、革命行動の見地からすれば国家と同程度の行動力を表わすものではないと非難した。

しかし、インターナショナルのうちに自由に連合を結成した労働者の集団は、どのようにして連帯を實踐し、

相互に協定し、意見を一致させているか？ それら集団を連帯の實踐に押しやるのは、同じ経済状況である。これは、彼らの行動が現存秩序の構えをいっさいの妨害から解放されたとき、どうなるであろうか？

インターナショナルは、どうして、連合体であるかぎり行動力を増進し、他方、総務委員会が一つの国家たろうとするやいなや分裂したのか？ それは、労働者が権威を憎み、自由であることを欲し、この広大なまっただき自由の實踐をとおしてのみ力ある者となるからである。

しかし、わが「協会」こそは、自主と自由な連合との原理の多産性の証明であったし、人類が精神のおよび物質的福祉を確保するための新たな獲得を旨として前進することができるのは、この原理を適用することによってなのである。

1 ミクロス・モルナル「第一インターナショナルの衰微」

（一九六三年）の抜萃。

2 ルイ・ベルナル「セザール・ド・パープの生涯と仕事」

（ブルユッセル、一九〇九年）参照。また同著者の「一八三〇年以後のベルギーにおける民主主義と社会主義の歴史」（ブルユッセル、一九〇六年—一九〇七年、二巻）を参照せよ。（モルナル注）

3 エリ・アレヴィ「ヨーロッパ社会主義史」（パリ、一九四八年）一五一ページ。（モルナル注）

4 Collins 男爵（1788—1869）は、その著書「社会契約」（一八三五年）「合理的社会主義」（一八四九年）で、土地共有を基礎とする、本質上、集産主義的な社会主義を説いた。彼の主な弟子 Louis de Potter は、一八五〇年に「社会教理問答」を出版した。

5 インターナショナル・ブルユッセル大会（いわゆる反権威主義派）に提出された報告、セザール・ド・パープ「将来社会における公益事業の組織について」（一八七四年）より抜萃。副題は編者による。

6 一八七五年八月一日と二日、ウヴェニーにおいて開かれたクルトラリ地区彫版師・細工師支部によるジュラ連合大会提出の報告。副題は編者による。